

科学研究費成果報告書「日本近代史料に関する情報機関についての予備的研究」（基盤研究
(B) (1)、平成9・10年度、研究代表伊藤隆、課題番号：09490005）より

2 広瀬 順皓氏

ひろせ よしひろ 駿河台大学 文化情報学部 教授 日時：1997年12月25日 出席者：伊藤 隆 季武嘉也 勝村哲也 有山輝雄 有馬学 小宮一夫 村瀬信一 梶田明宏 西川 誠 古川隆久 中静未知

伊藤 それでは2回目を始めます。終わったところでまた、3回目を誰にするかを決めたいと思います。

広瀬 最初に少しお喋りをして、それからいろいろ聞いていただければと思います。

実はこのメモを作るときに伊藤先生の私家版のを拝見しまして、それをお読みいただければ僕の知っていることは何もないと思ったんですが、憲政資料室にいたころも何回か地方に出張をしまして、そのときのメモなんかを見ながら、きょうは、そこにあるような地方にどんな文書があるのかということと、編纂事業でどんなものが生まれてくるのかとか、そのようなこととお話したいと思います。

ご存知のように近來の史料の所在目録というのは、現在のところ2つあります。1つは史料館が編纂をして三省堂が出した『近世と近代の資料の所在目録』と、それから学習院の学習院史料室が出しました5冊の『旧華族資料所在調査報告書』というのが一応、いまのところいちばん大きなものであろうと思われま。

それで、三省堂の史料館の史料所在目録というのは、史料館の人たちが実際に地方に行って探したというわけではなくて、基本的には、史料館が持っている各地の史料目録をもとに各機関にアンケート用紙を出して、その回答を集めたものということになっています。あれを見ていただくと分かるんですが、基本的には印刷目録が出ているものが対象というか、アンケートを受け取ったほうでは、仮目録とか未整理の資料というものは出さなくて、きちんと整理されたものを出しているということがあって、たとえば、国会図書館の憲政資料室というところを見ると、わずか13文書しかないということになります。

それから、学習院の『旧華族資料所在調査報告書』は、記述の単位がばらばらなんです。たとえば、1点のものでも1行、数100点のものでも1行ということで、どれが多くて、どういう文書がどこにあるという、史料を見つけるには非常に不便であるという感じがします。しかも、あれは基本的にはアンケート調査の集計結果ですから、やはり実際に行ってみないと分からない資料というのは出てこないということになります。そういうこ

とで、地方周りをして自分の目で史料を確かめるというのは結構、大事だろうという気がしています。

あと、1年に近代史関係の展示会というのは何回も何回も開かれています、そのときに新しい史料が多少出てくるということがあります。たとえば、今年の5月の国立公文書館の憲法展は、公文類集の戦後版の憲法の部分が出てきていて、あれは今回初めてなわけですけれども、今後も少しずつ整理ができしだい公開するというふうにいらしています。ですから、注意をしていけば、どこにどんな史料があるのかというのは分かるはずなのですが、1人ではなかなかできないのが現実ということになります。

そういうことで、いままでどういう形で地方の史料保存機関に近代文書があるのか、というのをきょうのテーマで少しお話をしたいと思います。

最初に地方史料保存機関の近代文書と書いてありますが、これは主として図書館のことを考えています。図書館以外にも歴史史料館とか博物館とかがそれぞれ文書を持っているんですが、図書館とか歴史資料館では、公文書と古文書と行政資料という、その3種類を一緒に持ったり、1つずつ持ったりするということが多いようです。

それで、近代文書が図書館に入るとするのは、実は100年近い歴史があるといえますか、1903年に日本文庫協会という——いまの日本図書館協会が、帝国図書館が上野にできたことを記念して結成されます。その翌年から『図書館雑誌』というのが発行されるわけですが、この当時の図書館の関心というのは、図書・雑誌はもちろんですが、歴史史料とかそういうものに割りと関心を持っていました。たとえば、『図書館雑誌』には史学雑誌の紹介とかそういうのが載っています。つまり1903年当時というのは、明治政府というのかな……明治初期の史料の収集・編纂事業というのが一段落してちょっと真空状態になった時期で、図書館が史料の収集を担当しようという意図があったようであります。

1908年に和田万吉東大図書館長が、日本図書館協会の総会で「日本図書館協会の発展について」という講演をしまして、そこで「図書館は積極的に郷土資料を集めよう」ということを提唱します。そして、その同じ年に山口県立図書館が収集方針を発表して、「一国の文献を収集するのは国立図書館であり、一地方の文献を旧記・古文書に至るまで収集するのは地方図書館の任務である」というふうに言って、本格的に政策として文書の収集を始めます。どうもこれがいちばん早いらしく、山口県立図書館の収集方針というのは、やがて全国の県立図書館に移っていくような気配があります。この辺はよく分かりません。

1912年になりますと、田中義成——東大文学部の教授が、「古文書および系図について」というテーマで図書館協会の全国大会で講演をします。その中で、そこにちょっと書いておきましたけれども、「各地方の方々においては、古文書の流出・散逸にご注意くださる

て、その地方その地方の古文書の収集をお願いしたい」というようなことを言い、また1915年には、新村出も同じ図書館協会の総会で「近世文化史料と九州の図書館」という、これは九州の佐賀で図書館大会をやったので、そういうタイトルで史料の収集をすすめたという経緯があります。こうすることで全国の古い図書館には、郷土資料の中に相当たくさん古文書、文書が含まれているわけです。

そこに山口県立の例でいくつかを出しておきましたけれども、たとえば、山口県立文書館では、これはもと山口県立図書館にあったものを分けたわけですが、そういう資料があります。

伊藤 そういう文書があるという中に、上山満之進ですか。これは三哲文庫と書いてありますが、文書なんですか、本なんですか。

広瀬 文書です。

伊藤 その下の児玉源太郎もそうですか。

広瀬 そうです。これは本が主体なんですけど、児玉源太郎文書は、自分の家の文庫を徳山市に寄付をして図書館にしたんですね。それで何万冊だったかを基礎にして始めたんですけど、太平洋戦争のときに東京に置くと危ないというので、児玉文書を徳山のここに預けたんですね。それが一緒に分けたということだそうですね。

伊藤 いま児玉秀雄さんの文書を尚友倶楽部が、寄託まではいっていないけれども、とにかく預かって整理をしていて、その中に一部、源太郎さんのものがぱらぱらと入っているという感じですね。

広瀬 源太郎のは……これは山口に出張をしたときに図書館の人に聞いたんですね。それから山口県立文書館で、田中義一、湯浅倉平とありますけど、その次の林朝鮮総督資料というのは、林何とかさんって忘れてしまったんですが、山口出身の人で、台湾総督府の警務部局長と朝鮮総督府の警務局長をやった人で、大正中頃の人です。それで、ちょうど同じ頃の教育課長が隈本文書で教育研究所にあるという、そういう感じですよ。

それから下関文書館というのは、これは昔、長府図書館とか長府博物館といったところで、そこにも少しあるということです。それから、光市立図書館の松岡梅太郎というのは、これは維新の志士なんですけど、こういうのが残っているのは、どうも郷土資料との関係であるということです。それから、山口女子大図書館の寺内文庫は蔵書だけのようです。

それで、山口大学経済学部付属東亜経済研究所というのがあるんですけど、旧商高関係の図書館で戦災にあっていないところは結構、統計類とかそういうものをたくさん持っています。滋賀大学の経済学部図書館とかそういうところは、文書そのものではないけれども、いま手に入りにくい資料が結構あります。東亜経済研究所の資料というのは、満州とか中

国大陸が中心だったと思います。

伊藤 これは目録が出てますか。

広瀬 出てません。

それで、その他に地方の図書館にある資料というのは、個人図書館、個人コレクションということで、割りと大きいのは、たとえば、愛媛の今治市の河野信一さんという帝国法令図書の社長さんが集めたものを、建物を作って寄贈したものがああるんですが、そこでは幕末維新史を含めて1万8000点の史料があります。これは、ご自分で3冊——1000ページ近い写真を付けた解説というか目録を出してまして、それを見ると結構面白い書簡があります。

伊藤 目録は手に入るんですか。

広瀬 目録はこの記念館に行けばあると思うんですけども……

伊藤 憲政記念館ではなくて、この記念館にですか。

広瀬 僕は、河野さんの自宅が本郷の西片にありまして、その家までもらいに行った覚えがあります。

伊藤 じゃあ、憲政にはあるわけですか。

広瀬 憲政にはあります。今治市に寄贈してある何とかというので。

伊藤 ちょっと話がそれるけど、憲政はかなりたくさん目録は集めているけど、あれを借り出すことは可能かな。

広瀬 大丈夫だと思いますが、コピーをするわけですよね。でしたら、お金があればコピーを頼んでしまえばいいんじゃないですか。

季武 未整理のですか。

伊藤 未整理のじゃなくて、憲政のいちばん奥のところにいろんなどころの目録があるし、それから憲政記念館も随分目録は持っています。だから、あれを借り出してコピーするというのもひとつの手だから、じゃあ、それはやりましょう。

広瀬 それから、東大の法学部の目録はありますか。

伊藤 かなりはありますけれども、全部は揃ってないかな。

広瀬 あそこはいちばん最後はどこまでなのか分からない。

西川 90番近くの池田成彬が97年かに出てますから、それが最後じゃないですか。

伊藤 それは持ってますか。

西川 持ってます。

伊藤 どこで持ってますか。

西川 私も持ってます。

伊藤 だったら、今度足りない分を彼に貸してもらってコピーを作ろう。

季武 でも、西川さんが全部持っているというわけではないんですよね。

西川 ちょっとずつなので、全体のリストをもらえば重ならないのをコピーして持ってきます。

伊藤 じゃあ、それは中静さんに言ってください。

広瀬 それでこういうやつというのは、山川の歴史保存機関何とかっていうのを見ていると結構いろんなのが出てきて、たとえば、大阪経済大学には杉田のがありますよね。それから京大の文学部博物館とかいろんなのがありますね。あと、滋賀大学経済学部附属資料館とか、それから神宮文庫。

伊藤 行ってみないと分からないってということなんですね。

広瀬 ここに出ているのは代表的なやつですけども、たとえば、神宮文庫だと三条天皇文庫というものが8856冊あるということで、それに近代のものも含まれているというけれども、これは文書は多分入れていないんだと思うんですね。これはヒントにはなるけれども、行ってみないと分からないということです。

それから、たとえば、沼津の明治資料館ですか。

伊藤 沼津の明治資料館は行ったことがあります。

広瀬 あそこは井口省吾と江原素六とか。

伊藤 江原素六は確か目録をもらってきたな。

広瀬 井口なんかは、あれはどうも板棲駐屯地にあったのを預かっているという話ですから、自衛隊の陸海のああいふ3高官というのも持っているのかもしれませんが。

伊藤 呉の江田島なんか持っているんだよね。

広瀬 自衛隊のは紹介がないと見られないんですよね。

伊藤 大丈夫です。私、軍事史学会の会長でございますので（笑）。

広瀬 あと、近代史料の最近の集まり方というのは、編纂事業をして集まるというのがあるって、地方史の編纂だといろんなところでいろんな文書が見つかっているわけですが、民権運動をやっていたところとか、社会主義運動が強かったところとか、そういうふう等特色のあるところの地方史の編纂を見ると、意外と資料が出てくることがあるということです。たとえば、きょう持ってきましたけれども、新潟の黒崎町史編纂委員会というのは山際七司文書を……何回か僕は行ったんですが、ずっと見せてもらえなかったんです。しかし、町史がやるとああいふふうに目録ができるとか、そういうようなことがあります。

それから、大都市というのは変な言い方ですけども、東京とか横浜とか、ああいふところの地方史編纂事業をやりますと、明治後期以降の政党人とか官僚が市長やなんかをや

ったとか、あるいは市議会議長とか、そういう関係で個人史料を集めるということがあります。たとえば、いま横浜市史では有吉忠一文書とか、それから、地方官僚でした半井清とか、ああいうのが最近見つかったというような話をしています。

この地方史編纂のあれというのは、『日本歴史』の後ろの文献目録の雑誌の目次なんかを見ていると、何とか市史研究なんかが出てくるので、それで割りと拾えるだろうと。あとは、県立文書館とか県立図書館に行くと必ず地方史を編纂したところの目録が入っているんですね。ですから、それを見ると大体の様子は分かる。ただ問題なのは、山際家文書の目録を見ていただくと分かるんですが、他の名前になっているんですね。たとえば、山際昇氏文書というふうになっています。山際七司ではなくて現在の所蔵者の文書になっているので、ある程度中を見ないと、タイトルだけでは分からないということはあるので、それがちょっと不便です。

それから、横浜はこれ以外にも民政党関係者の横浜の有力者を随分集めているので、これは田崎君なんかに聞けば横浜の資料というのは分かるようです。

それから、その次が大学史ですが、最近は随分あって、大学史協議会も全国統一組織ができたそうですけれども、そういうところで結構たくさん個人文書を持っています。それで編纂が終わったところはそれぞれ、いま自分の大学の資料館を作ろうとか博物館を作ろうという構想があって、そちらに移しているわけですが、たとえば、早稲田だと安部磯夫……失礼しました。文字が違ってます（笑）。

伊藤 菊池武夫の「お」も違っているじゃない（笑）。

広瀬 違ってますね。急いで打ったもので失礼しました。

それで、大学史編纂以外にも大学図書館は結構コレクションを買ってますので、それも何らかの形でやっておく必要があると思うんですね。たとえば、早稲田だと、最近買ったのでは宮嶋誠一郎文書の残りを買ってますし、それから、立教だと谷文書を昔買ってますしね。

伊藤 何文書？

広瀬 谷干城文書ですね。それから教員が持っていた資料——深谷博治文書とか、渡辺幾次郎文書とか、そういうものがあるんですが。

伊藤 流出文書ですね。梶田君、しっかりやってくださいよ（笑）。

東大やなんかはすごくたくさん持っていて、ちゃんと目録も作っているし、それは全部ここに集めてありますけど。

広瀬 そうですね。あと日大とかね。

伊藤 日大は確か山田顕義は持っているんじゃない……

西川 山田顕義は書陵部のです。日大は金子堅太郎を持っています。山田顕義はあそこはな
いはずですが。

伊藤 そっちで持っているのは原文書ですか。

西川 写本です。

伊藤 写本でしょう。そうじゃなくて原文書を持っているという……あの出したのは写本
から写し出しているんですよ。

西川 あの時点では原文書を持っていなかったんです。

伊藤 原文書は確か日大が持っているというふうに聞きましたけれども、門外不出だとい
うような話で。

梶田 あのとき僕は日大の人に頼まれて仕事をして、一緒に山田さんの遺族まで行って話
を聞いていて、大学史のほうの人は全然把握してないです。

西川 掛け軸と一点物は持っているはずですけど。それ以外の……

伊藤 前に日大の図書館にいた人から僕は、いやあるんですという話を聞いてましたけ
ど。

梶田 ただ、法学部の倉庫に行くといろんなものが眠っている、という話は聞いたことが
ありますけどね。

伊藤 日大の法学部は今度、確か秦郁彦君が行ったんでしょう。彼を突つきましょう(笑)。

広瀬 それとあと社史なんですけれども、岩崎弥太郎文書というのが本社になくて静嘉堂
に何か置いてあるみたいだそうで、これは6、7年前ですかね……

伊藤 オープンにしてないでしょう。

広瀬 オープンしてないんです。ただ、岩崎弥太郎没後100年とか何かで、岩崎弥太郎書
簡集を作るという、代表で僕も読まされたことがあるんです。

伊藤 じゃあ、ものはあるってことは確かなんだ。それはどこで読まされたんですか。

広瀬 静嘉堂に行ってますね。あそこは編纂室が置いてあったのかもしれないんですけど
ね。

季武 加藤高明っていうのは、何か広瀬さんが前に言っていたんですけれども、ここに
あるということですか。

広瀬 静嘉堂ですか

季武 違うんですか。ここじゃないんですか。

広瀬 どこだろうな。いや、静嘉堂は分からないんだよ。目録に出ているのは、たとえば、
竹添進一郎だとかね。

伊藤 えっ、そんなのあるんですか。

広瀬 あります。文書じゃないんですけども、日記とかそういうやつですね。それが普通の写本の中にまぜこんであるわけですよ。だから、行かないと分からないですね。

伊藤 静嘉堂文庫の目録には出てないわけですか。

広瀬 出てます。ですから、その竹添の写っているのは、あれは竹添文書に近いんですよ。あれは諸橋さんが指南をして買ったわけですよ。だから、明治初期の竹添みたいな漢学者っぽい人たちっていうのは結構あそこに詩集とか何かありまして、その中に混ぜて入っているんです。

まあ、そんな感じで地方で集まるだろうと。それから、編纂事業で集まるだろうというようなことを、それをもとに何かひとつずつやっていくのがいいのかなという気がするんですが。

伊藤 これは、逆に言えば行ってみないと分からないというところがたくさんあるでしょう。だから、山川のあれで目星をつけて行って、その周辺をまた洗うというふうなことで、時間の余裕の取れる人は来年1月、2月辺り、ちょっと出張して探してきてもらえるとたいへんありがたいと。犬も歩けば棒にあたる類で。

広瀬 あと、各大学の図書館のコレクションをどうやって調べるかというのがありますが、前に国会図書館が出した『全国特殊コレクション総覧』という本があるんですね。それは何々文庫、何々文庫というのが入っていて、大きいのはそこで拾うことができます。

季武 あれは相当古いですよ。

西川 山川と重ならないものが入っているんですよ。

広瀬 あれを国会図書館はずっと維持しているはずなんですね。維持しているっていうのは、目録を出しますよね。それ以後のものを追っているはずなんです。

季武 (笑) 出してくれればいいのに。

広瀬 カードで維持していると思うんですね。

伊藤 それは憲政ですか。

広瀬 多分、参考課。

伊藤 行ったら情報くれますか。

広瀬 国会図書館の参考課で持っている情報っていうのは、そういう特殊コレクション要覧の続き。それから、連記のがありましたよね。

伊藤 政治家の伝記か。

広瀬 そうです。あれも続きを維持しているはずですよ。それで、図書館が出した書史の続きっていうのは、大体あそこで維持しているはずですよ。

伊藤 誰かにちょっと紹介してもらって……

季武 どうやってアプローチすればいいですかね。

伊藤 たとえば、枝松さんに言って紹介してもらおうということでもいいかな。

広瀬 いいと思います。協力してくださいということで。

伊藤 それから、せっかくのあれだから憲政の話をしてますが、憲政の目録を表に打ち込んで出してしまうても構わないかな。その辺はどういうふうにやったらいいだろう。

広瀬 たとえば、公式に協力してもらおうというふうにすればオーケーは出ると思うんですね。要するに、国会図書館側も名前を出してメリットがあるというような形でもっていけば、それは全面的に協力してくれると。

伊藤 どういうふうにメリットになるだろう。国会図書館の憲政資料室はホームページがあるかというところ……

広瀬 いまないでしょう。

伊藤 だけど、国会図書館のホームページはあるでしょう。それで、国会図書館の中に憲政資料室っていうところはあるでしょう。

広瀬 いまそういうふうにはなっていないと思いますが（笑）。国会図書館のホームページであるのは、バーチャル何とかあってあって、5つぐらいしか窓がないんですね。それで行事のお知らせとかそういうのがあって、その1つに電子図書館のページ、プロジェクトのページがあるんです。そこを開くと、憲政資料のマイクロ化をデジタル化する作業をやりたいと思っていますとか、そういうふうなことは出てきます。そこまでしかないの、個々の閲覧室がホームページを持つという形にはなっていないんです。

伊藤 もし憲政がその部分をホームページにできれば、そしたらこっちで作ってリンクしてもいいわけだ。

広瀬 そうですね。

伊藤 それをじゃあ、ちょっと申し込んでみるか。

広瀬 それで、いまの政治資料課長——北山さんっていう女の人なんですが、彼女が11月頃に電話をかけてきまして、こういう資料の情報交換みたいなものを政治資料課としても考えたいので、年が明けたら1度会いたいと言われているので、そのときにそういう話ができるかもしれないですね。

伊藤 ちょっと一緒に行きませんか。

広瀬 いいですね。

憲政の話といえば、それとあと、さっき言った僕のほうにあるいろんな機関からの目録ですが、あれは大体はガリ版刷ぐらゐのそういう目録ですよ。それ以外に手書きのやつをコピーで写したのとか、そういうのはいくつかありますね。

伊藤 ああいうのはだから、コピーを作って電子化して、とりあえず内部で使うと。

広瀬 あと昔、文部省が古文書調査というのをやったでしょう。70年頃かな、県別に。いま近代化遺産のあれを県別にやっているでしょう、2、3県ずつ。

有馬 研究調査ってやつですか。

広瀬 あれも結構入っているんですよ。

有馬 あれはね、たとえば、福岡の場合だとどういう形で残っているかということ、県立図書館が拠点になっているんですね。それで大学の研究者なんかも参加して、研究調査目録というのを出しているんです。それは家文書単位の概略と、場合によったら詳細な目録になっている場合もあるんですね。ただ、その段階の目録で往々にあるのは、まだやっぱり近代資料を古文書だと思っていないから、明治期多数とかね。

伊藤 やっぱり行ってみないと分からないということだね。

有馬 ええ、というのが多いんですね。ただ、地方でそういう調査をやると結局、近世から続いている家にあたることが多いですから、その場合にかなりちゃんと取ってある場合はあるんです。

季武 それは県単位なんですか。

有馬 あれは補助金が出たんでしょう。

広瀬 そうです。

伊藤 それはまとまって印刷物になったんですか。

広瀬 結果がですか。

伊藤 ええ。

有馬 県単位で多分、報告書を出しているはずなんですよ。金をもらったら多分出さないといけないと思いますから。それがどこかに集積されているかどうかは分かりませんが。

伊藤 それはどこが出したんですか。文化庁かな。

広瀬 文化庁ですね、きっと。

有馬 多分そうだと思います。

伊藤 じゃあ、文化庁とアクセスするかな。アクセスしなきゃならないところがいっぱいあるな。

広瀬 一部国会図書館に納本されているのがあって、出張の前にそういうのを探して、ここにありそうだというのを見て行ったこともありますね。

伊藤 一般の図書の中にですか。

広瀬 そういう報告書みたいなのが目録類の中に入ってますから。

伊藤 参考室ですか。

広瀬 ではなくて、書庫の中です。

有馬 特に行ってみないと分からないところは、場合によっては後追いをやっているんですね。ただし、それは研究調査の一貫ではないから、後追いをやっている場合があつて何かいいのに当たったとき、そのあとボランティアで目録を作ったりしている場合があるんです。

伊藤 ちょっと途中ですけれども、梶田君、あれからホームページに少しまた入れてますか。

梶田 この前、小池さんからお預かりしたものを入れたのと、それから、先生から預かりました『日本歴史』の史料館の「文書館・史料館めぐり」のリストと、それから、**広瀬**さんから谷干城文書の画像データをいただいたんですが、これは膨大な量なので、どんなふうに見えるかというサンプルだけちょっと載せてみたんですけど。

伊藤 画像抜きでは入れられないのですか。

梶田 いや、画像抜きでリストだけでも入れられますけど。

伊藤 画像を入れるとちょっとパンクするかもしれないよね。

梶田 そうですね。フロッピー自体……というか、向こうのハードディスクの容量は全然大丈夫なんですけれども、あれを送るのに60メガぐらいありますから、転送に時間がかかりすぎますね。

伊藤 じゃあ、目録だけ入れてください。

梶田 分かりました。

伊藤 目録だけだったら大したことないでしょう。

梶田 目録も結構な量ですね。

伊藤 みんなテキストファイルで入れたらどうですか。

梶田 そうですね。

伊藤 それでいま打ってもらっている分は、季武君のところにはいろいろあるんですか。

季武 いま小宮一夫君にここから借り出してもらって、東大の法学部の法政資料センターのを打ち込んでいる最中です。

小宮 一応ざっとは入れたんですけど、まだ履歴とかちょっと分からない人物とかがあったので、そういうのを調べたりとかしています。

季武 先日の広瀬さんが配ったフォーマットに則って入れていこうと思ったんですけど。

伊藤 それと、この前の有山君の報告と、そのときのいろいろの会話ですね。あれは打ち出して発言者にだけ配りました。それでみんなに手を入れてもらって、それが終わったと

ころで中のほうに入れてもらって、そしてプリントアウトもみんなに配るつもりです。そのほうがいいでしょう。だから、きょうのやつもそうしたいと思います。

それじゃあ、いまの広瀬君の話でいろいろ聞きたいことをみなさんちょっと聞いてください。この林朝鮮総督というのは林権助ですか。

広瀬 いえ、違います。もう少し中堅官僚です。これは段ボール箱4箱ぐらいの資料で、警察資料でしたね。割りと珍しいです。やっぱりいろんなものがばらばらに入っていてあれなんですけど、たとえば、岡山に松本学がありますね。

伊藤 ええ。あの目録はあなたからコピーをもらったから、あれのコピーをまた作って、あれはスキャナで取れるはずだから。あのスキャナもせっかく買ったのに、仕事をしてくれる人がいないから、アルバイトをちょっと頼んでくださいよ。

広瀬 その松本文書の中に、例の岩倉のお嬢さんのあれがあるでしょう。それでもう少しないかと思って調べたら、ノートルダム女子大学に斉藤なんとかさんコレクションというのがあって、その中に少し入っているんですね。それは、個人のコレクターがたまたま買って、それを大学に寄付したと。

伊藤 九大なんかは何か持ってないですか。

有馬 大学そのものですか。

伊藤 大学そのものというか、大学だとか学部とか。

有馬 あまりないんですよ。文学部の九州文化史研究所とっていた、近世資料が主なんですけどね。

伊藤 あれは何かすごい目録を作ってたね。

有馬 そうですね。要するに、地方の家文書がそこは圧倒的に多いんですね。

伊藤 まあ、史料館みたいなものですね。でも、あれの中も最後のほう……明治5、6年とか7、8年ぐらいまであるんですよ。どうして7、8年とか10年ぐらいで終わりになるのかちょっとよく分からないんだけど。

有馬 要するに、あそこはその後、収集を広げてないんですよ。だから、いちばんあそこが集められた時期にやっていた人の関心に結局なっちゃうんでしょうね。

伊藤 関心もあるんだろうけど、おそらく文書のあり方が変わってしまうんだろうね。多分、町役場が個人の家にあったのが、役場ができてそっちのほうに引っ越すとか。

広瀬 あとは出張に行っていないですか。

梶田 出張に行ってもあまり時間もないですから十分話も聞けないんですけど、地方によって随分意識が違いますよね。この山口県は非常に近代文書に対して意識がしっかりしてますけど、地方によってはやはり、話を聞いてみると近代の文書って、「資料ありますか」

って言うと、近代関係の文献を出してくるところが多いんですよね。

広瀬 奈良なんかそうですよ。奈良とか京都とかって（笑）。

梶田 近代の文書が古文書っていう意識が全然ないです。それと、富山県とか石川県とか福井県、ちょっとこの前、電話をかけて聞いたんですけど、県史編纂室とかそういうところ自体、自分たちが特に県史の編纂にあたって文書を収集してないっていうんですよ。文書を収集してないで、集めても大したものを集めなくて、人に任せて作る形で、特に資料収集の作業をやっていないというところもありましたね。

有馬 意外に政治家の家を追いかけるというのは殆どやっていないんですよね。

広瀬 あと、いまちょっと気になっているのは公文書のほうなんですけど、公文書館とか外交史料館とか防衛庁とか、一応、史料は分かって揃っているんですが、来年か再来年か近々、情報公開法が通る。そうすると史料の公開を請求することができるわけですよね。ところが、戦前の官庁の資料がどこに受け継がれていったのかというのが、割りと分かっていないんじゃないかと思うんですね。たとえば、大東亜省の文書は外務省に戻ったのか戻らないのか。あるいは、植民地関係といえば総督府の東京事務所であったわけですね。その史料はどうなったのか、どこに引き継がれたのか。そういうのが分からないと、情報開示されてもどこに請求していいか分からないわけですね。そういうことを調べる必要があるんじゃないかなという気がこの頃しているんです。

それともうひとつは、要するに、未公開の文書の所在をどうやって知るかという、そういうのがひとつと、もうひとつは、公文書というのは量が多くて、目録が不備でなかなか利用できないというのがありますよね。それをどうやったら直せるかといいますか、要するに、公文書のコンテキストで作られているわけですから、たとえば、門目に類別されて編纂されるというやり方をするので、一揆事件みたいなものは何文の何目に入るかを知らないと使えないわけです。そういうこともやる必要があるんじゃないかなという気はしているんですね。いまのところ目録の不備をどうやって補うかというのは別にして、未公開の史料がどこにあるのかというのを、組織規定とかそういうのから追えないかなというふうに思っているんです。

伊藤 法令ね。

広瀬 つまり、必ず組織法があるわけでしょう。どういう仕事をするかという事務文書がありますよね。それでつながっているところを見つければ、そこに公文書が引き継がれるわけですから。それで外交史料館には総督府文書が……要するに、外務省にあるけど史料館に持ってきてないとか、そういうような話をちらっと昔聞いたことがあるんですけども、そういうのはどうやったら調べられるのかなと。

伊藤 役所の廃止規定のときにそういうことは……

広瀬 廃止のときには出ないでしょうね。だから、たとえば、大東亜省が廃止されますよね。それで、変わって別の省庁ができればそこに行くわけですけども、外務省にまた戻るとなると特別に要らないんですよ。けども、大東亜省が廃止されたときに外務省の事務文章が変わると思うんです。アジアのあれを含めて入れなければいけないと。そうなっていれば外務省に行ったということが分かるわけですね。

伊藤 残務処理が当然あるわけですからね。興亜院の文書なんていうのは、あれは大東亜省に行って。古川君が見ている範囲では興亜院の文書っていうのは……

古川 いや、僕は原文書っていうのは見たことがないですね。

広瀬 その辺の分からないのはちょっと辛いんですね。

伊藤 憲政の仕事の関係でいろんなところと接触なさったと思いますが、たとえば、東京都の公文書館なんていうのは、あれはやっぱり個人文書も持っているんですか。

広瀬 殆ど持ってないですね。内田何とかっていう人の持ってますけど、あれは無理に寄託させられたとか言っていましたからね（笑）。要するに、公文書館としては持ちたくなかったと。東京100年史ってありますね。あれがあんまり新しい資料を使ってないでしょう。公文書だけでやっているんですね。

そうですね、県史なんかで割りと一生懸命やったのは……

伊藤 県史はかなりいろいろなところでやって、いろんな文書を集めたはいいいんですけども、整理ができないで段ボールでそのままとか、そういうふうな類はかなりあると思いますね。福岡県史はどうですか。

有馬 いちばん問題なのは、システムとして閲覧に対応するようになってないんですね。だから、行って何だかんだ言えば見せますよね。けど、そういう体制になっていないところが多いんですね。結局問題は、ホームページももう時期終わるんですけど、そのあと資料をどうするんだということは大分検討をやっているんですけど……

伊藤 まだ見通しがついているわけではないんですか。

有馬 ついてないですね。ただ、大分何のかんの言ったので、ともかく県がどこかに入れた段階で、請求があったら見せられるような人員の配置はするとは言ってますけれども、公文書がいつできるか分からないですから。

広瀬 それは、行く行く目録を出してあげましょうという、迷惑だとかって感じにもなりかねないですよ。

有馬 場合もあるでしょうね。

伊藤 見に来る人がいて対応できないと。

有馬 請求されても相手できないと（笑）。いちばん最悪の場合は、段ボールそのまま倉庫にしまいこんじゃって、そもそも出せないという形ですね。

福岡県史は、自分のところで寄贈してもらったり、いろんな形で持っているものが、まあ、近代でいちばん大きな流れのものなんですけど、かなりあるんですね。

伊藤 あれ自体も閲覧の対象としては考えられていないんですか。

有馬 いや、見せます。見せますけれども、積極的にどうぞとは言っていないんですね。

伊藤 それはそうでしょうね。

有馬 あと、あそこは毎年夏に調査を随分やりましたので、持ってきてはいないけれどもラフな目録は作ったというのから、詳細な目録を作ったというのから、一部マイクロに撮りましたというのから、段階がいろいろあるんですよ。情報そのものは福岡県内についてはかなりたくさん持っています。

伊藤 それは何か形になってますか。

有馬 カードだけです。

伊藤 カードか。カードっていうのはどうしようもないんだな。

有馬 ええ。その先どうしようもないですよ。行ったときは人を使ってバーツとやるんだけど、それをあとに打ち込んで冊子にするとか、そこまでは全く手が回らないですから。

伊藤 きょうの話を聞いていると、やっぱり各地回ってみたいとしようがないということがどうも結論のような気がするね。実際、私大の場合は、特に1、2月は忙しいことは忙しいんだね。ねえ、季武君。

季武 まあ、そう言いますが、私みたいに忙しくない人もいますけど……まあ、入試だけ外れれば。それとあと、他の人に誰か頼んで行ってもらうということもできますし。

伊藤 それもできるでしょうね、きっと。委嘱するということで。

広瀬 手近なところで横浜とか、そういうところは日帰りで行けるから、話を聞くだけだったら……

伊藤 それはいいんだけど、要するに、消費にならないんだよ。有馬君が来て調べてくれるっていうんだったら、それはいいんですよ（笑）。開港資料館辺りを拠点にして、あちこちに紹介してもらってバツと行くというのはいいいんですね。だけど、それにしたって1日で周りきらないでしょう。だけど、東京から行って横浜で1泊してというのは認められないだろうな。横浜辺りに行って高いホテルか何かに泊ったら足が出ちゃうよ（笑）。

広瀬 でも、開港資料館は情報が集まる場所だからいいですよ。

伊藤 あれもどこかと合併するとか……

有馬 あれはリストラが問題になっているんですね。

広瀬 あれはでも、第3セクターになったんでしょう。

有馬 まだ、なるという話で。地方の博物館が特に割りと最近できた場合には、博物館の場合は設立当初で収集予算がかなりつきますから買えるんですね。それで集めたところが結構あるんじゃないのかなと。その場合には、少し時間が経てば目録は出ますよね。福岡市の博物館が、鹿島の鍋島の文書をものすごい金を出して買ったんですけど、あれは大隈の書簡とか、かなりいろんなものが入っているんですね。これは目録が出てます。

広瀬 歴博が大久保文書を買ったでしょう。あれは鹿児島から持ってきたんですけども、それ以外にまた次々と出てくるって言ってましたね。

伊藤 どこから。

広瀬 大久保家から。

伊藤 大久保家は何であるものがあるのかよく分からないんだけど、椅子だの机だのそういうものからはじめて、物もあるし文書もあるという、非常に不思議なんですね。

広瀬 どこにしまってあるんだろうと思いますね（笑）。

伊藤 さっきちょっと言いましたけれども、尚友倶楽部で児玉秀雄さんの文書をいま整理しているんですけど、これもかなり膨大な量で、まだ目録が完成してないんですけど、仮目録は殆どできかかっています。

それでもう1ついまやっているのは、樺山資紀の文書ですね。これは憲政にあるものの片割れだと思いますが、かなりいいものもあります。それで、いまこれの目録もほぼできあがりかかっているんですが、これができあがると、樺山愛輔の文書を今度は遺族が出してくれるということになってまして、それで僕は、これは将来どうするかなど。憲政に持っていても、憲政はこっちに対して何のサービスもしないのならば、この大学でもらっちゃおうかというふうにも思っているんですが、これは取引しようかと（笑）。要するに、処理については一任されているものですから、こっちの計画にかなり全面的に協力してくれるんだったら持っていきますと。

その他に尚友倶楽部では坊城さんの資料、これは大した史料ではないんですけども、これを出版するという事で作業をしていますが、あの文書そのものはまたどうかしなきゃならんだろうと。

あと僕自身のあれで言いますと、いま蠟山文書ですね。これはミニチェロさんが借りていたわけですけども、ミニチェロさんが返すと言ってますので、蠟山道雄氏に、返ってきたらぜひこっちに見せてほしいという話をしておりまして、実はミニチェロさんは選んで借りていったと言うんですけど、道雄氏は家には何も残っていないと言っているので、

そんなはずはないと。彼女が選んだと言っているんだから絶対その選んだ残りがあるはずだと。ですから、裏の物置に入っているかなということなんですよね。それで手紙を出して、何とかこれは全部こっちで人力も出すから、裏の物置の整理をやってくれといま言っているわけです。

あと、これはまだオフレコなんですけど、矢部文書は憲政記念館に入っているわけなんですけど、あれは寄託と寄託以前の預かりというのがあるんです。預かり部分っていうのは、要するに、全く整理してないんですね。箱ごとに分けるということもしてないんです。それで、この部分をこっちにもらおうということで、いま交渉をはじめているところでして、それで矢部さんの戦後のいろんな文書が出てくるということになりますと、ここの学長さんが吉村融さんといひまして、吉村正の息子であると。吉村正さんは自民党の政治大学の校長さんだと。それで、当時のいろんな政策提言や何かもたくさんやっているという人でありますから、これはぜひ出してくれと言って学長に迫っているところでもありますけれども、なかなかうんと言ってくれないわけですね。まあ、矢部文書で少し圧力をかけようかと思っているところです。

広瀬 伊藤先生とずっとやっているペンディングになっているのがいくつかありますよね。たとえば、大野さんの日記とか、ああいうようなものをどうかしたら使えると思うんですが。

伊藤 そうですね。中原静子さんでしたか、あの方も結構なお年になったんだろうな。私も結構なお年になりましたので、あの方も多分なったんだろうと思いますが（笑）。

広瀬 80半ばを越えているんじゃないかな。

伊藤 ちょっとこれは交渉してみましよう。

広瀬 あと、徳山大学ってあるんですか。

伊藤 ありますよ。

広瀬 そこの経済研究所が、高橋亀吉研究というのを始めて大々的にやりたいんだけどもという、それで……

伊藤 何で高橋亀吉なんだろうな。

広瀬 出身地ですか。それで、来年度から研究所の事業として資料の収集を始めると。

伊藤 だって、資料はもう証券図書館とか憲政にあって、それで証券図書館の分はいま確か、僕が話をつけたから、あれは少しずつ借り出してきて、ゼロックスコピーを作って憲政が全部集大成するということになっているはずですよ。ちゃんと引継ぎでやってくれているらそうになっているんですけどね。

広瀬 そうですか。じゃあ、確かめてみます。

あと、植民地官僚の文書が意外と見つからない。さっきのと合わせて……

伊藤 さっきの大野さんとかさ……

広瀬 宇垣なんかもそうですね。

伊藤 前にフーバーのイーストエーションコレクションに行ったときに、あそこに平沼の文書と荒木の文書と、それからもうひとつ朝鮮総督府関係の人の文書とかがあったんです。それについてその後どうなったかというのを、この間、尚友倶楽部の上田さんがちょうどフーバーに行っていたので調べてもらって、そのリストは手に入れました。だから、その情報をどンドンあれの中に入れていたんですが、入力するほうはなかなか進まないということなんですよ。

広瀬 入力は、単純に入れるだけだと1時間いくらという感じですか。

伊藤 テキストファイルにすれば簡単に入りますよ、あっちに入れるやつはね。

梶田 ええ。テキストファイルだったらそのまま入れる形ですから。

季武 前々回は憲政資料室は広瀬さんをお願いするということになっていて、それで西川君のほうでは宮内庁でしたっけ。

西川 はい。目録全部は無理なので、近代に関係あるのだけ抜粋して入れてもらいました。

伊藤 仕事してもらってますか。

西川 はい。3冊あるうち1冊目は終わってます。

季武 あと、法政資料センターのほうは僕と矢野君、小宮君がやりますけど、どうですかね、手が足りませんかね。

広瀬 学生に頼めます。

季武 でも、なるべく予算の超過もありますので、いっぱい働くように（笑）。

伊藤 いっぱいお金を使うようにしてくれませんか困るんですよ。

中大の菊池武夫文書は目録あったっけ。

小宮 どうですかね。多分まだ作ってないんじゃないかと思うんですよ。

伊藤 中央大学史史料集っていう、あれに確か何かあったように思ったけどな。あれは原文書だっけ、文書を起こしたやつか。

小宮 ええ、起こしたやつです。

伊藤 目録それ自体はなかったのかな。ちょっと調べてみよう。

小宮 あと中大は多分、長谷川如是閑ので書簡とかが整理はしてあるんですけど、これも結局、殆ど情報が公開になっていないと思うんですけど。あんまり大した書簡はなさそうだったんですけど、前ちょっとあそこに入って見たとき、古島一雄のやつがちょうどシーメンスか何かのときぐらいで、自分の政治感想を書いているのが目についたぐらいなんで

すけど。

伊藤 長谷川如是閑の関係文書ですか。

小宮 ええ。それで、書簡とか整理しても多分、金原先生とかあの辺の政治思想史のやつなので、一応、封筒には入れて表題とか中身を少し書いてあるんですけど、たとえば、政治史の人とかが見ればまた違った使い方とかができるんじゃないかと思うんですが。

伊藤 中大の大学院生にこの間、僕は2人会ったけど、男の人は君の後輩だって。

小宮 誰ですか。

伊藤 聞いたんだけど忘れちゃった。それから、金原先生のところにいる女の人、軍事史学会で会ったの。ちょっと名前を今度……

小宮 あっ、軍事史学だったら五十嵐っていう、男はそうじゃないですか。

伊藤 ああいう人たちに頼めないか。

小宮 多分……あまりこんなこと言っちゃなんですけど、できるかどうかっていうのはちょっと。

伊藤 できるかどうかって、ただ史料の……いや、だから、目録の打ち込みだけやってもらえば、あとは君が引き受けてくれればいい。

季武 小宮君、いま長谷川如是閑の目録ありますか。

有馬 あれは何か本を出したでしょう。

小宮 ええ。

古川 あれは書簡ないんですよ。

伊藤 長谷川如是閑集っていうやつですか。

小宮 いえ、そうではなくて目録みたいなやつを……

伊藤 ああ、そういえば何か僕もらったな。何でももらったのかな、飯田さんという人から……

小宮 ああ、校正の。

有山 そうだ、田中浩さんとか飯田泰三さんとか。

伊藤 飯田泰三さんを何で知っているのかといたら、中国人の留学生で宗方小太郎をやっていた彼、なんていったかな。

有馬 日本歴史館か何か出したでしょう。

伊藤 そうそう。その史料を頼まれて、それで知り合って、そしたら長谷川如是閑が来るからおかしいと思ってたんだけど（笑）。

広瀬 そういえばジャーナリズムは、三宅雪嶺がまだ三宅家にありますね。

伊藤 そうですか。

有山 あれはどうなったんですか。早稲田の佐藤能丸さんが整理するっていう話はもう大分前に聞いたんですが。

広瀬 彼は一応、全部マイクロ化して整理をし始めた、起こし始めているとか言ってましたね。

有山 それは早稲田に入るんですか。

広瀬 いやいや。

有山 彼個人でやっているんですか。

広瀬 彼個人でやっているみたいで、写真でやっていますから、原本は三宅さんの家にあると。

伊藤 あと、憲政で目録にも何にも出さないけど持っているっていう隠し財産もあるんでしょう。

広瀬 いや、もうないでしょう。ありますか。

伊藤 あるって言ってたじゃない、君も。まあ、ここでは言わないだろうけど。

広瀬 いやいやいや。辞めるときまでに無理して全部出しちゃったと。だって、芳賀文書も出したでしょう。言いましたっけ、そんなこと（笑）。何があったかな。前から未整理のやつですかね。結局、浅沼の残りとかそういうやつで、それは50箱ぐらい、もっとあるかな。浅沼文書はものすごい大量に来ただけけれども、ぱっと見ていい資料だけ出したんですよ。要するに、寄贈手続きができないので。だから、全体の3分の2ぐらい、もう少し多いかな、4分の3近くまでは出ているけど、それ以外のものもまだあるんです。

伊藤 それは寄贈されたんですか。

広瀬 それも寄贈されたんです。要するに、寄贈リストに載ってないけれども、それも含めていただいたと。だから、あれも労力さえあれば整理できるんですね（笑）。そのぐらいじゃないかな。

伊藤 憲政記念館なんかでも公開してないのがあるんですよ。

広瀬 あれは能力がないということでできないんです。

勝村 映像資料、写真なんかはどうなんですか。

古川 前に中野目〔徹〕さんに、公文書館には写真週報とか何かのために大量に撮った写真が未整理であると聞いたんですけど。

広瀬 写真週報のネガでしょう。あれは片割れなのね。それで、写真週報のネガは全部、銀座か何かのJTBの倉庫から出てきたんですよ。それで、そのうちの面白いところはNHKが取って、残りが公文書館。

伊藤 じゃあ、NHKが持っているのですか。

広瀬 NHKがいいところは持っているはずですね。太平洋戦争の始めの赫々たる戦果なんていうところは。

それで、いまは知りませんが、公文書館の写真複製室に行ったときに、それは1枚、1枚焼いて整理しはじめていたんですね。それで、ネガに誰がいつ何を撮ったか全部書いてあるんですよ。たとえば、ヒトラーユーゲントが来て長野に行ったとか、そういう誰が撮ったというのが書いてある詳細なリストがあるので、あれが公開されるとものすごく便利なんですけどね。

勝村 そういう写真も伊藤先生のお考えでは、目録を付けて集めようとお考えですか。まだ、文書が軸ですか。

伊藤 そうですね……映像資料をどうするかというのは、それ自体としてかなり大きな問題で、いろんなところでまた考えはじめているし、これはお金の問題と非常に絡んでいる問題ですから、迂闊にはちょっと広げられないなと思っております。要するに、いまいろんなところで映像資料を集めて将来のお金にしようというプロジェクトがいくつかあるみたいなので、それでちょっと怖いなど。そこに入り込んで行くというのは危ないと思っておりますが、ただ、実際問題、資料収集をやっているとアルバムがあるんですよ。このアルバムがキャプションが付いていればいいんですけども、何も付いていないと何の写真なのかっていうのはまるで分からないんです。遺族も分からないんですよ。そういうアルバムが結構出てくるということがありますが、これをどういうふうにしたらいいものか。複製を作るにしたってものすごくお金がかかるし。

有馬 難しいですね。黒木親慶の文書もかなり写真があるんですが、そもそも写真って、まず難しいのは、写っている人間が分かっている、どうやって目録を作ったらいいか分からないというのがあるんですね。それで黒木親慶の場合も、写真は「えびの」の資料館にまだ別に置いてあるんですよ。置いてあるといたって、ばさばさっとそのまま置いてあるんですね。一度、中見さんと僕と中原さんとで見に行って、彼らはあるものについては写っているロシア人が分かるんですね。けどもそれは、そのうちある程度のもの多分、中見さんのところで複製を作ったと思うんです。それをまたそのまま同じ状態でしまいこんで置いてあるという格好になっているので、次に行ったときに、あれを出してくれと言って、パッと出てくるかどうかはちょっと分かりません。という状態のままですね。

伊藤 だから、非常に困るんですよ。憲政だって文書の中に写真があるでしょう。写真何10枚とかいう形で袋に入っちゃっているというのがね。

広瀬 そういうのもありますね。ちゃんと整理したのは南雲だけですよ。南雲はたくさん写真があるんですね。それで息子さんがお元気でよく覚えていて、来てもらって全部書い

てもらったんです。「これは何の写真ですか」とか言って。そういうふうにしないと整理できないですね。

伊藤 かなりしんどい仕事ですね。この間、坊城さんの資料のときもそうだし、樺山さんのときもそうだったかな。坊城さんの資料を出すときは、要するに、写真をかなりたくさん載せようというのでアルバムを借りたんです。そしたら膨大にあるわけです。だけど、聞いてもよく分かんんですよ。ですから、これはやっぱり収集はしなきゃならないと思いますけれども、目録化するっていうのは非常に困難を極めるんじゃないかなと。ただ、あるということだけは、やっぱり文書と一緒に収集しちゃうわけですから集まっちゃうんですね。

有馬 だから、ひとつは目録を作るのが難しいのと、もうひとつは、もらってしまえば問題はないんだけど、もともとが写真だから、土台がコピーですから、利用の条件というのがものすごく複雑になっちゃうと思うんですよね。あれはすごい厄介ですね。

伊藤 この前、ある人から写真を預かりまして、人物を特定してほしいという話があったんですけど、いろんな人に出て聞いたんですけども、誰一人として分からないというね（笑）。

勝村 だから、逆にいえば、そういうものを先に入れておいてホームページで公開すれば、これは俺知ってるよということを書いてくるかもしれない（笑）。

伊藤 有名な人の写真を人名録みたいなあれで写真を載せているやつをとにかく収集して、それで同定していくというやり方もあり得るね。だけど、16歳のときの写真と54歳のときの写真ではどうても同定できないと（笑）。

広瀬 今年卒業の学生に、幕末から明治5年ぐらいまでの写真のデータベースを作るといのがいて、やらせたんですよ。そしたら、あの時代はそんなに写真が多くないから、いろんな本を持って来るんだけどみんな同じやつで（笑）、これはデータベースにならないじゃないって。

伊藤 みんな同じ写真を、あちこちから……

広瀬 いろんなところで使っているんですね。それで、幕末・明治の写真とかがアルバムにいっぱいありますよね。同じ写真がどこでも使われていると。

伊藤 松戸にある戸定がたくさん持っているんでしょう。。

広瀬 あそこはでも、自分で写したやつでしょう。

伊藤 そうそう…そうそう。

広瀬 それから目白の尾張徳川家、あそこも持ってますね。

伊藤 黎明会もそうだ、行って話をしなきゃいかんのだな。徳川義親の日記をね。いろいろ

ろやらなきやいけないことをたくさん思い出しますが、じゃあ、これからどうするかということになると、これ時間が足りないよ（笑）。

広瀬 あとひとつだけ、青木周蔵は来年か再来年、来年着工かな。那須に青木周蔵記念館というのができるそうです。県が作って……県かな町かな……それで文書も入れると。

伊藤 そうですか。

広瀬 西洋館をあのまま使うんじゃないですか、あの幽霊が出たという。

伊藤 あそこの家が持っているものですか。あれは何か少しばらけたでしょう。

広瀬 それで国学院……藤井先生がいちばん最初かな、安部さんと一緒に写真を撮りに行ったんですね。それでこのマイクロフィルムがちゃんと残ってないんですよ。断片的にし国学院のほうにも残ってないんですね。それから今度、青木記念館に入る文書も写真とあまり重ならないんです。それで、4、5年前に神田の古本屋街にたくさん青木文書が出たんです。

伊藤 スタンプ屋から出たっていうやつでしょう。

広瀬 ええ。だから、どうなっているのか全然分からない。

伊藤 あれは憲政で全然買わなかったんですか。

広瀬 買わなかったと思います。ものすごく高くて買えなかったと。何か三鷹のほうのお医者さんが買ったとかいう噂を聞きましたけど（笑）。

伊藤 安部磯雄の文書っていうのはあるんですか。

広瀬 安部磯雄のはですね、これは野球部の合宿所を壊したところから出たというやつですね。

有馬 球場を潰すときに野球部の部室から出てきたというのがありますよね。あれどうしたんです。

広瀬 あれはいま早稲田大学史に置いてあるんです。

伊藤 校史編纂室にあるんですか。

広瀬 あります。それで、あそこは大学史が終わったんですよ。その後どうなるかまだ分からないんです。

伊藤 図書館にということではない。

広瀬 だから、大学史史料館を作ろうというのと、それから、図書館の特別資料課に移管しちゃおうという、いま2つ意見があって調整がつかないと。

伊藤 ちょっとこれは歩かないとしようがないな。

広瀬 それで、各大学史は結構持っているはずなんですよ。たくさんは持っていないけど一部持っているとかね。たとえば、早稲田だと小山松寿のが少しあるんですね。それは

憲政に入る前に小山さんのお祖母ちゃんが、出身校だからというので寄付したのがあるとかですね。

伊藤 国学院も結構いろいろ持っているんだろうな。

広瀬 国学院は、蔵書になってなくてあるんですよ。たとえば、佐々木行忠文庫というのは、目録があそこの図書館の事務室に置いてあるんですね。それで「その本はどうになりましたか」と聞いたら、「いやあ」とか何とか言っていましたけど、ちゃんとした返事をもらえなかったんです。

伊藤 文書があるんですか。

広瀬 文書は分かりません。文庫というこんな厚いファイルがあって、「見てください」「いえ、いえ」とか言ってね。

西川 あれはカードで見るかぎりは本でしたね。1冊だけ明治30年代の日記がありました。

伊藤 いま**広瀬**君がやってる北楽〔ほくせん〕社との仕事っていうのは、少しどういうことなのかを教えてください。要するに、あそこで目録付でマイクロで売っているでしょう。そうすると目録は著作権がある部分になりますよね。だから、あれを入れちゃうわけにはいかないわけですよ。

広瀬 著作権者の承諾があればいいんです。それで、あれはで電算写植で入れているので、殆どフロッピーがあるんです。僕も持ってます。必要だったら交渉してみます。

伊藤 交渉してくださいよ。あれまだいろいろやるつもりなんですよ。

広瀬 ええ、まだやります。

伊藤 さっき言った青木周蔵もそうですか。

広瀬 いえ、青木家は違います。

伊藤 あれはどこから出すんですか。

広瀬 青木は記念館を作るという……

伊藤 いえいえ、出版をするということではいま集めているというふうに、水沢さんだったけ……

広瀬 そうですか。

伊藤 うん。だから、これは北楽社だと思って。

広瀬 そうですか。いや、僕は知りません。

伊藤 北楽社じゃなくて、他にあれと似たようなことをやっているところはありますか。

広瀬 ないでしょうね。じゃあ、聞いてみましょうか。

伊藤 いや、確か北風社だと思った。じゃあ、とにかく新年になったら憲政と一緒に行き

ましよう。それで、説得したり、すかしたり、頼んだり、土下座したり（笑）、居丈高だったりいろいろやって（笑）、これで話がつけば前例ができるから、その次は北岡君のところへ行って、これもまた説得して東大法学部に承諾してもらおう。まあ、上手くいくかどうかは難しいところだけれども、法学部は何せ法律ですから（笑）、情ではいかないから。でも、法というのは目的があれば、どういうふうに解釈するかということを法学者がやってくれるからです（笑）。

勝村 東大法学部の何を？

伊藤 近代立法……近代日本法政史料センターというね。

勝村 ええ、できましたね。

伊藤 それが大量の文書と原本と、あれはマイクロフィルムとを持っているんですね。

勝村 それは公開してくれないんですか。

伊藤 一応、目録を出したりなんかはしてますから公開は公開なんですけど、いろいろ制限がついてまして、東大法学部の先生の紹介がなければいけないとか、何かそんな話でしょう。他の紹介でもいいんですか。

小宮 いや、やっぱり法学部……

古川 僕、松浦〔正孝〕さんが卒業のときに1回見せてもいましたけど。

小宮 ただそれも、非常に来てほしくないけど、まあ、しょうがないから見せてあげるみたいな感じで。それで、この間もちょっと行ったんですけど、いまはちょうど中国人か韓国人の……外国人の方に中北さんから助手が変わられて、それで、中北さんのときもそうだったんですけど、資料を見ているときに、暇なときにこうやって目録とか見ていると、「もう仕事が終わったんですか」とか、そういう感じで（笑）……

勝村 外国法文献センターというのは公開されているんですよね。

広瀬 あそこはオープンですね。

勝村 建物は違うんですか。

広瀬 上と下です。

伊藤 明治新聞雑誌文庫は、あれも法政資料センターの中ですか。

広瀬 中ですね。

伊藤 だけど、一応別になってますよ。あそこも比較的簡単に見せますよね。

古川 あそこもだけど、建前は法学部の先生の紹介って書いてありますよね。でも、誰もそんなことはしないけど（笑）。

勝村 だから、その外国法文献センターを通してここへ入っていくという。

広瀬 そうはいかないでしょうね。

古川 あれは構造上できないですね。

勝村 (笑) できないんですか。

古川 僕は前、松浦さんの研究の手伝いで文書を読んであげたんで、それで見せてもらったんです。

伊藤 それじゃあ、ひとつはそれと、それから横浜は、前から開港資料館にちょっと来てちょうだいとか言っているから行って見ますが、誰か一緒に行ってくれると助かるけどな。季武君、一緒に行きますか。

季武 ええ。いまちょうど縁もありますので。

伊藤 縁がある？

季武 先週もあそこに行って忘年会やってますから (笑)。広瀬さんは来なかったけど。吉良さんという女性がいて伊沢多喜男文書を、あれはあそこが持っているわけじゃないんですか。

広瀬 そうそう。

伊藤 あっ、そうだ。宇垣のはどこでやったんだっけ。

広瀬 早稲田の……

伊藤 いやいや、宇垣文書を出したの。

広瀬 芙蓉書房。

伊藤 あのグループはまだあって、それがいま伊沢をやっているんでしょう。いやあ、自分のやっていることはあんまりよく言わないからさ。駄目なんだそういうのは (笑)。

広瀬 ごめんなさい、忘れてた。

伊藤 (笑) 忘れてるわけがないだろう。

広瀬 (笑) 思い浮かばないですね。

伊藤 あれは文書はどうなったんですか。

広瀬 文書はいま開港資料館の書庫に置いてあります。それで、再来年の3月までに資料集を出して、文書は憲政に入れようというような話です。

伊藤 じゃあ、横浜のほうにとにかく行って、いろいろ情報を集めてまいります。季武君と一緒にいくと。古川君、どこかに行ってちょうだいよ。

古川 どこかですか。

伊藤 山川のあれを見て、よさそうなところ。温泉に近いとかさ (笑)。小池と同じように奥さん連れて行ってあげれば……

季武 さっき広瀬さんがお話された資料館で出した本だとか、国会図書館の全国特殊コレクションだとか、それから文部省、文化庁の調査ですか。この辺ちょっと、その市史を見

たりして分かるものは拾い上げて、その他またそれぞれ行くと。それで、もし自分で行けなくても、誰か他の人をさしつかわすというようなことを……

梶田 ちょっと文化庁の人に聞いてみます。

伊藤 うん、聞いてみて。

季武 それでもしまとまってあれば。

伊藤 買えるものはいろいろ手配しているんですけど、必ずしも買えるわけではないんですよね。そのとき作って配って終わりという、目録類はそういうのが結構多いので。

広瀬 高知の塩見俊二文庫っていうのは、あれは資料はないんですかね。

伊藤 さあ、どうでしょうね。

広瀬 これは内務省ですよ。

伊藤 そもそも内務省の文書はどうなっちゃったんでしょうね。

広瀬 何か1回新聞に、人事院の倉庫から何とかってというのが出ましたよね。あれはどうなったんですか。

有馬 自治省の地下にあるとかいうやつでしょう。何か新聞記事に出ましたよね。

広瀬 あれはその後どうなったんですか。

古川 ちょうど中野目さんから、公文書館も自治省文書をまた目録を作り直して、もうすぐ差し上げますとか手紙が来ました。だから、未整理のやつが入ったんですかね。

広瀬 公文書館って未整理のやつがすごく多いんだよね。

古川 ええ、下のほうに。1回その状態だけは見せてもらいました。

伊藤 彼は筑波に行ったんでしょう。

古川 いや、きっとその行く前に手がけていた話なんですね。

伊藤 1度中野目さんの話も聞かないとね。

じゃあ、もうちょっとそっちの話にしますけれども、話をお聞きしようとして僕が考えているのは、1人は伊藤光一氏。それからもう1人は中見さん。それからもう1人は原君。それで、もう1人は中野目氏なの。それで、この間ちょっと原氏に偶然会ったもので、東大の経済学部はかなりいろいろ持っていて、同時に彼は大蔵省の財政史にも関わっているのでそっちのほうの情報ももちろんあるし、彼自身がいろいろあちこち動き回って資料収集をやっているんで、収集といっても結局、自分の関心のあるものだけしか見てないから、どこに何があるけれども、自分が見ているのは……彼は物動なら物動ばかり見ていると。まあ、こういう感じだから、そういう話を全部やってくれと言ったら、彼は喜んでやりましようと言っているんで、もしあれだったら次回、原氏からの聞き取りをやるというふうになんて考えているんですが、いかがでしょうかね。他にもっとこっちを優先しろ

という意見があれば伺います。中野目さんは誰がいちばん親しいんですか。

季武 小池かな。

古川 まあ、僕も一応、親しくお付き合いさせていただいてますけど。

伊藤 じゃあ、古川君から頼んでもらおうか。次回かその次ということで、中野目さんに古川君から頼むと。1月か2月……2月のほうがいいか。僕も原君に1月頼んでみるから。それで君のほうで打ち込んでくれたらどんどんフロッピーを、季武に送るのか、それとも梶田君に送ってくれればいいんだな。

梶田 じゃあ、私のほうに。

勝村 目録作って送ります。

梶田 お願いします。じゃあ、これは先生のところに置いておいてよろしいんですか。これは沖縄の勝村さんの資料の一部。

勝村 それは郵便で送った分だけですから、ごくごくもう……

梶田 一応こちらに置いておけばよろしいですね。

伊藤 沖縄の？

梶田 この前、沖縄に行かれて、私も話は伺っていないんですけど……

伊藤 そういえば、沖縄関係の資料の目録は我部君が作ったよね。

広瀬 彼が集めたやつね。あります、あります。

勝村 我部さんのやつは、近代よりも近世以前の……

伊藤 いやいや、そんなことないですよ。

広瀬 ただ、沖縄にあるやつじゃないんですよ。沖縄に関するやつなんですよ。

伊藤 いや、沖縄にあるやつも入ってる。

広瀬 ちょっとしか入ってませんけどね。

伊藤 彼が何か公文書館とか憲政とか……

広瀬 そうそう、外交史料館とか。

伊藤 いろんなところをとにかく走り回って集めた資料の目録なんだよね。

勝村 我部さんのやつはいま法政にあるんですか。

広瀬 いや、彼は自分でマイクロフィルムで持っているはずですよ。それで、あとは琉大に残してきたとか。琉球大学のお金で撮って残してきた分と、それから自分のところで持っている分と2つに分かれたんです。

勝村 琉大で撮った分は、全部マイクロフィルムを公開してくれると言っていました。琉大でそれは話をしました。ただ、残りは法政にあるんじゃないかとか何か言っていて……

広瀬 いや、自分が持っているんじゃないですかね。法政には入れてないと思います。

伊藤 我部さんの目録をもらったんだったら、僕ももらったけど、マイクロフィルムも転写させてくれないかな。

広瀬 あれ便利ですよ。

伊藤 今度我部さんに頼んでみるかな。我部さんも1度話を聞いてみてもいいんだな。彼はまたいろんなどころに出入りして、あそこにこんなものがあるというような話を。それで、中見さんは多分、満州とか中国にある日本語関係の資料ということで話をしてくれるんじゃないかなと思うので、これは3月、4月辺りに設定しようかなと思っています。

問題は予算の消化であります、いま残がどれぐらいになっているかは分からないよな。

季武 中静さんがきょうはいらっしゃらないから……

伊藤 中静さんね、何か捻挫しちゃってずっと休んでたけど、もう郷里へ帰っちゃった。

季武 ただ、おそらくいっぱい残っているはずですから（笑）、ぜひよろしく。

伊藤 その書陵部のやつの打ち込みはどういうふうに……要するに、明治天皇紀、明って書いたやつが、あれを抜き出しているということですか。

西川 はい。臨時帝室編修局本、三条公行実編輯掛本、それから御所本といわれている明治天皇のところから流れたといわれるものと、それから鷹司本、そういった維新よりこっちのばかりを抜き出しています。

伊藤 そうすると、あれは学習院が作ったのとは重複しないんですかね。

西川 重複します。

梶田 あれも学習院の目録と同じで、一点物もあったり、かたまりもあったりするんです。

伊藤 あの中身を打ち込むことはできないかな。中身っていうか、要するに目次を。

広瀬 見ながらじゃないとできない。

梶田 写本は目次は作ってあるのかな。

伊藤 作ってるよ。

西川 いろいろあります。作ってあるのは、一点ずつの書簡が全部入っているのもありますし、同じ写本でも付いてないものもあります。明本だけで1200ありますから。そのうちの1つに140冊というのもあるので。

伊藤 それは誰だ。

西川 参考史料雑纂です。

伊藤 ああ、そうか。

西川 末松謙澄が14冊ですね。そういうのがあるので、ちょっとたいへんですね。

伊藤 まずはいまのを作ってから考えるということだな。それはだから、今度入れるとき

は三条なら三条のところに入れて、同時に書陵部でどういうものを持っているかというの
も入れないといけないですね。それはちょっと工夫してください。

梶田 分かりました。

伊藤 だから、できた分からだんだん入れたらどうですか。

梶田 そうですね。じゃあ、ちょっと市川さんとも相談してみます。

有山 来年の予算もかなり頑張って使わなきゃいけないぐらいの額ですか。

伊藤 そうです。来年度500万ぐらいありますから、今度は機械を買うのがないですから。

有山 中見さんの話のあれで中国へ行くってというのは駄目ですか。

伊藤 外国旅費に使えるのかな。

季武 可能になりました。

伊藤 行ってみますか。

有山 ちょっと行ってみたいですね。

伊藤 なるべく早く中見さんの話を聞いて、3月か4月にちょっと北京に行かなきゃいけ
ないみたいだから、どうやったらいいかちょっとよく聞いて、少しでも見てくるかなとは
思うけど。

有山 遼寧とか東北にやっぱり……

伊藤 まあ、あっちのほうに多いんですよ。北京の日本公使館文書っていうのは、あれ
はトラブルで終わりになってしまったからどうしようもない。今度の軍事史学会の出した
日中戦争の諸相というあれに、劉傑と蔡さんか何かを紹介していたと思いますが。

梶田 この本をちょっとお返ししますけど、「文書館・史料館めぐり」はもうホームペー
ジのほうに載せておきまして、最新の宮内庁書陵部までは入れておきましたが、同じよう
なのが『軍事史学』に……

伊藤 『軍事史学』にあるんですよ。

梶田 それのリストが欲しいかなと思って、私のところに『軍事史学』が来てないもので
すから。

伊藤 頼んでみます。他にどうですか。

梶田 これ、例の谷文書のCD。私のところでもうコピー撮りましたので、これを先生に
……

伊藤 これは何ですか。

梶田 これは、そのデータをエクセルできるように。

伊藤 そうですか。

梶田 これは小池さんにこの前お借りしたフロッピーです。

伊藤 これは小池に返すやつかな。

梶田 いや、分かりません。とにかく先生のほうからお預かりして……

伊藤 えっ、小池の、何だこれは。

梶田 外務省の何とかの……

伊藤 ああ、そうか。これも入れましたか。

梶田 入れました。

伊藤 どうやって見られるんですか。目次が付いているんですか。

梶田 一応、メンバーページからライブラリーというところをたどっていくと……

伊藤 ちょっと待って。あれね、この間、埼玉のあれでやってみて、自分の部屋の、それでkinsから始まって長いメンバー何とかがって、あれを入れてやったら入れないんだよね。

梶田 パスワードの画面が出ますか、ユーザー名とパスワードをという。

広瀬 パスワード出るよ。あそこのスラッシュの前まで出るように。それで拒否されたと思いました（笑）。パスワードを入れたら。

伊藤 パスワードを入れたら拒否されたの。

広瀬 今朝（笑）。

梶田 ユーザー名とパスワードを入れても、メンバーを入れてスラッシュだけだと入れないんですよ。ちょっと僕の実験でファイルを壊しちゃって、そのあとにdefault.htmlと入れないと入れない。

季武 それメールに入っていましたよね。

梶田 ええ。だから、メールを送っている方は一応、それは書いてあるんですけども、ご覧になれました。

伊藤 待て、待て、待て。メールを送るっていうのはどういうんだ。

梶田 皆さんに……伊藤先生のほうにもメールが届いているはずなんですけど、埼玉の。

伊藤 あっ、埼玉行ってないんだ（笑）。

勝村 そしたら、先生のパソコンで埼玉のメールが見れるようにすればいいんだ。

梶田 そうですね。

伊藤 いやあ、まだここつながってないんだ。もうすぐつながる、つながるって言いながら。

勝村 つながっても、ここから見れるように向こうの……

梶田 そうですね。こっちが繋がれば、もうこっちのメールでいいと思うんですけどね。

伊藤 そうすればここから見られるでしょう。

梶田 ええ、見られます。

伊藤 最初からそれを入れればいいんですか。

有山 そしたらユーザー名とパスワードなどが出ますから。

梶田 一応このアドレスのあとにスラッシュを入れて……

伊藤 前に僕にくれたやつはデフォルトが入ってないわけか。

梶田 それは私のミスで（笑）。index.htmlというのがちょっと壊れて。

伊藤 いや、インデックスというのがあったろう。

梶田 ええ。スラッシュだけで何も入れていないと普通、index.htmlというファイルを読みに行くんですけども、ちょっとそれ……

勝村 スラッシュまでで読みに行くはずですね。

梶田 ええ。そのindex.htmlのファイルを壊してしましまして、削除もできないし、大塚商会の人に現地のサーバー機を触ってもらっても削除もできなくなっちゃって、そのファイルを読みに行くと、どうしてもIDパスワードも使えないという状態なので（笑）。だから、何か別のファイル名まで指定しないと駄目になっちゃったんで、まあ、逆にセキュリティは高まりましたけど（笑）。

勝村 私、沖縄へ行ってきました。一言だけいいですか。筑波大学の岩崎宏之さんの「沖縄歴史情報研究」という重点領域研究で、琉球処分までのデータを集めるという仕事があります。だから、奄美、徳之島辺りを含めて琉球処分に関するところまでは、先島まで一応集める手筈はできています。それで、その人たちとのコネクションが4年間あったものですから、琉球処分以降の近代のほうをどうするか一応頼んできたのです。いまさっき言われた我部さんのものも、もちろんあるわけですけども、それでは不完全です。沖縄公文書館が琉球政庁の関係のものを、精力的に集め目録がかなりとられてますから、いただいて入力する話と、琉大とその他大学関係で近代のほうを進めてもらうという話はできました。ただ、その他にどのようなものがあって、どういうふうな目録を入れたらいいかということについては、金城守さんたち地方史の研究者のグループがおられますから、お願いしたらどうかと思います。

それで、琉球政庁ができるところまでぐらいでひとまず切らないと、それも含めるとなると、たいへんな量になってきてしんどいと思います。それに、資料はかなりの部分が流出しているんですね。ハワイ大学、コロンビア大学、フーバー研究所へ行ったりしております。ハワイへ行ったものについては殆どみな、岡山のノートルダム女子大の横山さんが調べています。このリストはもらいます。

琉球政庁の資料はもう殆ど公文書館に全部入っているらしい。未返還のものは、太田知事と沖縄公文書館長がアメリカへ行って交渉して、全部マイクロに撮ったと聞いていま

す。だから、それはもちろん未整理です。リストだけ急いでもらって、それをキンズで公表する。ただその点、伊藤先生が、太田知事と宮城館長と話していただいたら済むことじゃないかと思えますけれども。ですから、政庁を除いてそれ以前に集めたほうが得策だなという感じがしました。

伊藤 分かりました。全部これは記録に残って、全部やらなきゃならない仕事が山ほどできたということで。有山君、どこか出掛けて何か調べてこようという気はありませんか。

有山 (笑) 忙しいですね。2月、3月は大学の雑用の時期ですからね。

伊藤 私大は駄目なんだな、国立か公立じゃないと。広瀬先生、いかがですか。せっかく山口県に行ったんだからさ。

広瀬 2月でいいですか。2月の10日過ぎだったら。

伊藤 いいですよ。

広瀬 じゃあ、行く場所ですね。

伊藤 いや、だから行く場所を、まあ、ここに挙げてあるようなやつを挙げて、3泊4日とか。

広瀬 分かりました。

勝村 誰か高知には行かれていますか。

伊藤 高知は、伊藤光一氏に聞くとかなり詳しい……あっ、この間、小池が行ったんだ。

勝村 あそこの横に青山〔せいざん〕文庫というのがありますね。

伊藤 青山文庫は僕も行ったことがありますけれども、あれはこの間、小池は行ったのかな、行ってないかな。

季武 行ったかもしれないですね。

勝村 あそこなんかは正倉院関係のものがたくさんありますね。写しがね。それから、明治の初年に正倉院から流れたんですね。だから、その関係が何かあると思うんです。

広瀬 田中光顕でしたね。見つかったとか何か言ってましたけどね、民権資料館の筒井君っていうのが。あそこにちゃんとした学芸員が初めて入って整理をしたというのを4、5年前に聞きましたから。

勝村 15年ぐらい前に行っただけでね、忘れちゃってよく分からない。

広瀬 その前はひどかったみたいですね、何も整理されてなくて

勝村 司牡丹の本店があるんで、そっちの方の調査に……(笑)。

梶田 調査って、土日がかかっても大丈夫ですか

伊藤 もちろん大丈夫ですよ。

梶田 出張が入らなければ、この前、福島テレビの人にインタビューを受けて、逆にいろ

いろ教えてくれと言ったら、いいですよと言われたので、ちょっとそのついで福島県に行けたら行こうかなと思っているんですけど。

伊藤 ぜひお願いします。

勝村 福島に行かれたら白河をちょっと。明治6年に日食があつて、外国人が沢山来たので白河英学校ができました。東大で東洋史を始められた箭内亘さんは白河英学校の出身です。榎本武揚の関係のものも白河にはあるはずなんです。だから、非常に面白い資料があると思うのですがね。

梶田 郡山にはいわゆる教育関係の博物館があつて……

勝村 そういうところにあるかもしれないから、案外いいのがあるかもしれないですよ。青山大学にその関係の文庫がありましてね。それも15年ぐらい前だからちょっと分からない。白河に行こう行こうと思つて結局行けてない。

伊藤 じゃあ、そろそろ終わりにいたします。次回、私と原さんで話して独断で日にちを決めますので、またご通知を差し上げます。それで、もし原君が1月がどうしてもまずいと言ったら、済みませんがまた古川君に連絡して……

古川 それを待つてから連絡をいたします。

伊藤 お願いするか、あるいはまた伊藤光一君に頼んでもいいし。

古川 中野目さんは1月じゃないほうがいいと思います。

伊藤 じゃあ、そういうことで仕事を少し進行させてもらいたいと思います。(第2回終了)